

5月10日（日）主日礼拝レジュメ

「何のために集められたのか」 使徒の働き 7章17～43節

ステパノは、ここからモーセについて語るが、ステパノの説教において最も長い。

ステパノはモーセの人生を三つに分ける。20～22節のエジプトでの養育期で、22節には「モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。」と言われている。このように主ご自身がモーセをイスラエルの民をエジプトから導く指導者として「ことばにも行いにも力のある者として整えられた。次が23節以降で、モーセが40歳になってからのことであり、40歳になってモーセに人生最大の危機が訪れる。それは、「自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こった」ということです。しかし、人々はモーセを受け入れませんでした。しかし、30節を見ると、そこからさらに40年が経ち、ある意味モーセの人生における別の転換期が訪れた。シナイ山の荒野において、柴の燃える炎の中で、御使いがモーセに現れた。そして、イスラエルの民に対する出エジプトのみわざや四十年間の荒野での旅などは36節に短くまとめられている。38節の「生きたみことば」とはモーセが主から授けられたいわゆるモーセの律法を指していると思われる。律法が与えられていることは、イスラエルの民にとっては大きな特権だった。それは、神とイスラエルの民が契約を結んでいるしるしだから。つまり、律法を守って生きることでイスラエルの民は神の契約の民であり得た。そしてステパノは、39節で律法に逆らっていたのは、私たちの先祖たちだと言い、モーセに従うことを好まず、かえって彼を退け、律法への不服従が41節では子牛の像を造るという偶像礼拝にまで発展したと語っている。

4 2 節で「そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の万象に仕えるに任せられました。」とされています。これは、ローマ書1章24, 26, 28 節にも通じるが、これも一つの神のさばきと言える。そして、不信仰なイスラエルの民の姿は、真実な神への礼拝の姿勢が失われるかたちで現れた。律法に定められたいけにえとささげ物を神のもとに携えて来ることもなく、心からの真実な礼拝を神に献げることもなかった。それが4 3 節では天体を神とする偶像礼拝に発展し、最後はバビロン捕囚というさばきとなって現れたということです。モーセの不在時に自分たちに先立って行く神々として金の子牛の像を作ったり、天の万象を偶像の神としてそれらに仕えたりして、イスラエルの歴史は、まさに神への不服従と偶像礼拝とそれに対する神のさばきの歴史であったことをステパノはここで言おうとしている。

モーセは確かに神に召されましたが、イスラエルの民は決して彼を受け入れようとはしなかった。出エジプトのみわざを見せられても、モーセに逆らい続け、偶像礼拝の罪を犯し続けた。そして、モーセを受け入れなかった先祖たちのように、あなたがたはイエスを受け入れようとせず、それどころかイエスを十字架につけて殺してしまったのではないかとステパノは最高法院を構成している人々に訴えようとした。まさに、イスラエルの歴史は、神への不服従と偶像礼拝とそれに対する神のさばきの歴史であった同時に、神が立てた指導者に従わず拒絶する歴史であり、それがイスラエルの罪の歴史となった。

イスラエルの歴史は争いの歴史だったと言える。これは、他国との争いではなく、仲間内での争い。モーセを受け入れず争い、そして預言者を受け入れず、預言者と争い、イエスを受け入れずイエスと争い、イエスの弟子であった使徒たち例えばペテロやヨハネを受け入れず彼らを迫害することで争い、そしてステパノと争っている。まさに「あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか。」とモーセが、同胞たちが争っているところに現

れ、和解させようとしているが、ステパノもそう言いたかったのではないか。そして、主イエス様ご自身が、「あなたがたは兄弟だ。どうして傷つけ合うのか。」と私たちに言われているのではなかろうか。私たちが集められているのは、傷つけ合うためなのか、イスラエルの民のように神が立てられた指導者に逆らい、罪に罪を重ねる、そのような罪の歴史、負の歴史を重ねるために、私たちは集められているのかと主イエス様は問われているのではないか。私たちには、神がお立てになった教会のかしらである主イエス様がおられ、私たちは、この大牧者に従う。そして、私たちにはみことばが与えられていて、このみことばに従う。そして、私たちには賜物としての聖霊が与えられていて、この聖霊のもとに一致することができるし、一致しなければならない。多くの恵みが与えられている私たちは、主ご自身が「あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか」と言われることがないように、罪に罪を重ねる教会の歩みとならないようにしなければならない。